

自分の考えを明確にする思考プロセスを習得させる国語科学習指導の工夫 — 複数の情報を吟味し、関連付けながら自分の考えを伝える学習活動を通して —

広島県立世羅高等学校 花崎 明日香

研究の要約

本研究は、自分の考えを明確にする思考プロセスを習得させる国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、「自分の考えを明確にする思考プロセス」とは、対象認識のための思考と表現活動のための思考が相互に働き、相手や目的、状況に応じた表現を行う過程のことであるとした。この思考プロセスを習得させるために、形態の異なる複数の資料の読み取りに基づき、自分の考えを特定の相手に伝える活動が有効であると考えた。第1学年の国語総合の授業において学習指導を行ったところ、情報どうしが相互に関係し合って生徒の思考に影響を及ぼし、相手や目的、状況に応じた表現を行うことができた。また、生徒自身も、複数の情報を関連付けて思考することの重要性に気付くことができた。このことから、複数の情報を吟味し、関連付けながら自分の考えを伝える学習活動は、自分の考えを明確にする思考プロセスを習得させるために有効であるといえる。

I 主題設定の理由

高等学校学習指導要領（平成30年告示、以下「30年要領」とする）の「第2章 各学科に共通する各教科」「第1節 国語」「第1款 目標」には、以下のように示されている¹⁾。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。
- (3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

また、共通必修科目である「現代の国語」について、高等学校学習指導要領解説国語編（平成30年、以下「30年解説」とする）では、「実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目」²⁾と位置付けられており、これからの国語科には、実社会で活用できる国語の力を育成する学習指導がより一層求められていることが分かる。実社会で活用できる国語の力について、「30年解説」では「他者と

は、広く社会で関わりを持ち、世代や立場、文化的背景などを異にする多様な相手のことである。実社会で活躍していくためには、こうした相手と言語を通して円滑に相互伝達、相互理解を進めていく必要がある。状況や場面に応じた他者との関わりの中で、必要な事柄を正確に伝え、相手の意向を的確に捉えて解釈したり、効果的に表現したりすることができるようにすることに重点を置いている。このような力を育成して、生徒が自分の思いや考えを広げたり深めたりすることを目指している」³⁾と示している。高木展郎（2018）は、「『現代の国語』では、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼をおき、論理的思考力、相互に交流する力、情報への適切な判断といった実社会で求められる言語能力の育成を図ることを重視しています」⁴⁾と述べている。これらのことから、実社会では、他者と適切なコミュニケーションや相互理解を行うための情報の適切な解釈と伝達、また、それに基づき自分の考えを広げたり深めたりすることが求められていると考える。現代社会では、一つの事柄についても様々な形態かつ膨大な量の情報が溢れている。状況や場面に応じた他者との適切なコミュニケーションを行うためには、一つの情報だけを根拠に判断し表現を行うのではなく、数多くの情報を精査し吟味した上で自分の考えを明確にしていく思考のプロセスを習得していることが求められると考える。

もちろん、現行の学習指導要領においても、社会生活に必要な国語の力の育成が軽視されていたわけではなく、高等学校学習指導要領解説国語編（平成22年、以下「22年解説」とする）の、教科の目標についての解説では「高等学校国語は、従前、社会人として必要とされる国語の能力の基礎を確実に育成することを重視しており、今回の改定でもそれに変わりはない。これを充実させるためには、広く社会生活全般を視野に入れた指導が欠かせない」⁵⁾とある。しかし、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年、以下「答申」とする）に、高等学校国語科の課題として「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている」⁶⁾とある

ように、実際の授業においては、講義伝達型の授業に偏りやすく、「多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現する」というような実社会で求められる言語能力の育成が行われにくい現状がある。また、所属校における国語科の教員を対象に行ったアンケートによると、昨年度、現行の共通必修科目である「国語総合」の授業において、実社会に必要な国語の資質・能力を育成することを目的とした学習活動は、科目の授業数全体の約2%程度しか行われておらず、今後求められる国語の資質・能力を生徒に育成する授業展開を十分に行えていない現状がある。そこで、現在の国語科学習指導の在り方を再検討し、実社会で求められる言語能力の育成を効果的に行うための授業改善が急務であると考えた。

本研究は、複数の情報を吟味し、関連付けながら自分の考えを伝える学習活動を通して、他者と適切なコミュニケーションを行うための効果的な思考プロセスを習得させる指導の一例を示すものである。

Ⅱ 研究の基本的な考え方

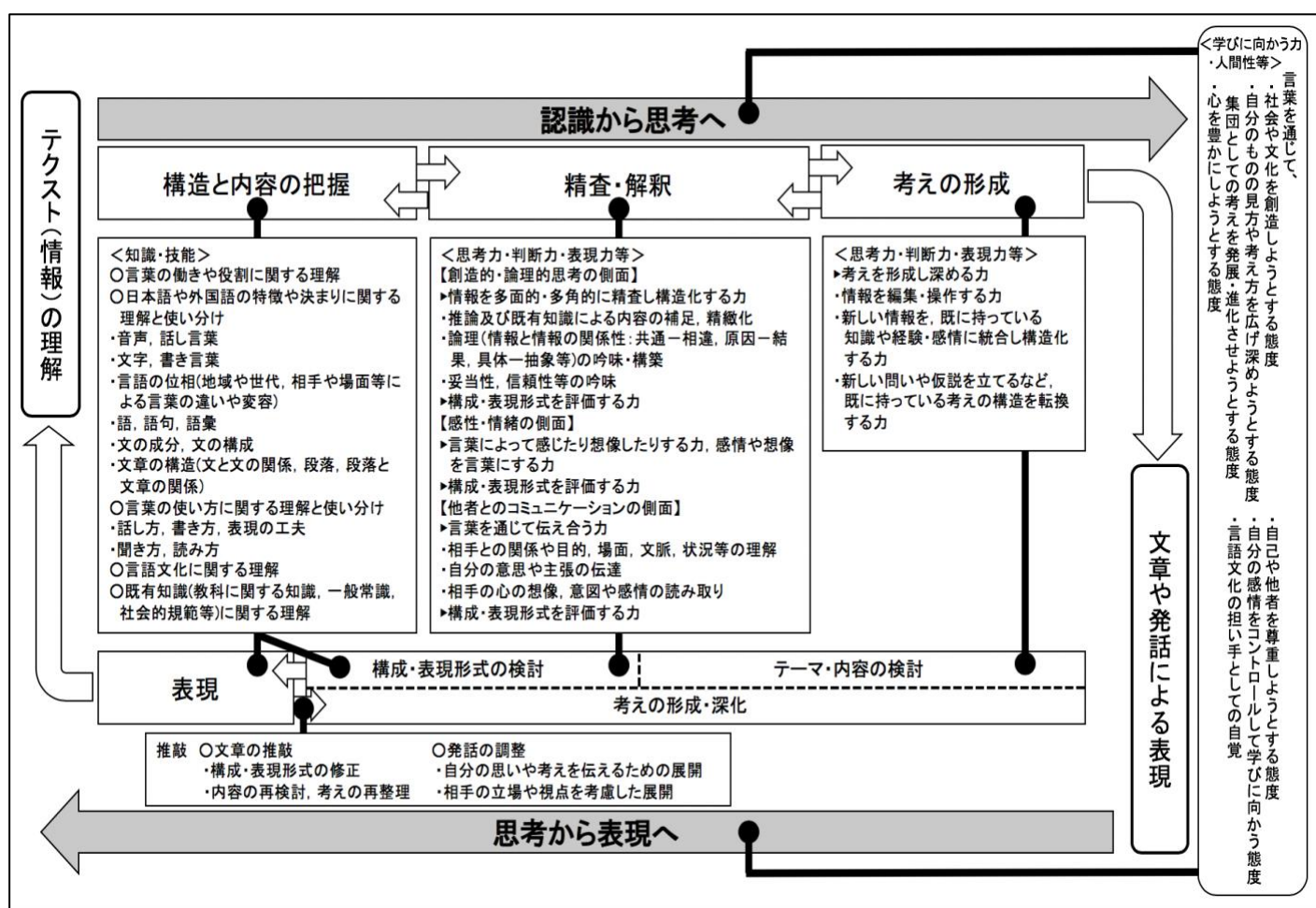


図1 言語能力を育成する資質・能力が働く過程のイメージ

1 自分の考えを明確にする思考プロセスとは

言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ（平成28年）では、テキスト（情報）の理解（構造と内容の把握）から精査・解釈を経て考えの形成に至る過程を、「認識から思考へ」とし、考えの形成においては、言語能力を構成する資質・能力のうち「考えを形成し深める力（情報を編集・操作する力、新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力、新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力）」が働くとしている⁽¹⁾（図1）。また、「この『認識から思考へ』、『思考から表現へ』という過程は単発的に発生する流れではなく、それぞれがつながり、循環的に繰り返される流れであることが望ましい。『認識から思考へ』という理解の過程から『思考から表現へ』という表現の過程につなげ、理解したことを表現することによって自分の思考を深めること、さらには、『思考から表現へ』という表現の過程から『認識から思考へ』という理解の過程へつなげ、表現したことを理解し直すことによって、自分の思考を更に深めることが考えられる⁽²⁾」と述べている。

田中宏幸（2019）は、「思考」を「対象認識に働く思考」（思考A）と「表現活動に働く思考」（思考B）とに分類し、対象を把握・理解するために働く「思考A」と、相手を想定しながら表現方法を決定していく際に働く「思考B」は、重なり合う点も多いと述べている⁽²⁾。

以上のことから、「自分の考えを明確にする思考プロセス」とは、田中の述べる「対象認識に働く思考」と「表現活動に働く思考」とが互いに機能し、かつ行き来を繰り返しながら、相手や目的、状況に応じた表現を行う過程のことであると稿者は考える。また、この思考プロセスを習得させることは、「30年要領」の教科の目標に示される「国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」の育成に繋がると考える。

2 複数の情報を吟味し、関連付けながら自分の考えを伝える学習活動について

(1) 本学習活動の意義

新設される共通必修教科「現代の国語」の「C 読むこと」の「（1）指導事項」は、「ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握すること」「イ 目的に応じて、文章や図表などに含ま

れている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めること⁽³⁾」の二つである。このイの指導事項について、幸田国広（平成31年）は、新科目の性格が端的に表れた指導事項であるとした上で、実社会においては、言葉を、多様な形態の情報とともに読み取り、読み取ったことを基に判断を行い、行動することが求められていると述べている⁽³⁾。また、学習指導要領の改訂に伴い「情報の扱い方に関する事項」が新設されたことについて、大澤由紀（2019）は、知識基盤社会とも言われる膨大な情報が行き交う世の中で、必要な情報を取捨選択して得ることや、情報相互の関係を捉え、自分の考えを形成していくことが求められていると指摘している⁽⁴⁾。

前述のように、本研究で生徒に習得させたい思考プロセスとは、認識及び表現の際に働く思考が両者の間を行き来する過程で、次第に主体である生徒が自身の「考え」を明確にしていくというプロセスである。幸田と大澤の論から、考えを形成する際に生徒がまず認識すべきものは、多様な形態の情報であるということが出来る。また、図1で示しているように、表現されたものが新たな情報として認識され、循環的な流れを生み出すことから、考えを他者に伝える、つまり表現する活動は、思考の行き来や循環を促すために必要不可欠であると考ええる。

以上のことから、自分の考えを明確にする思考プロセスの習得を実現するための学習活動として、複数の情報を吟味し、関連付けながら自分の考えを伝える学習活動を行うものとする。

(2) 学習活動の具体

「現代の国語」の指導事項C（1）イについて、幸田は、「従来の高校国語科にはなかったものであり、目的や場面といったコンテキストに文章や情報を乗せて、相互に関連付けて読む能力を指導することになる。この指導事項は、文章を読むことを自己目的化せず、必要や目的との関係で読み、考えることになる。文章を読む文脈ができるため、読み取ったことをもとに考えたり判断したりする必要も出てくる⁽⁵⁾」と述べている。このことから、具体的な目的や場面を想定して学習活動を行うことは、より切実感を持った読みを可能にするとともに、自分の考えを明確にするプロセスを習得することにおいて有効であると考ええる。

ここで、学習指導要領解説に示される「読むこと」についての言語活動例を、現行の「国語総合」と、

新設される「現代の国語」とで比較し、特にイについて表1にまとめた。「国語総合」では、基本的に「文章」を読み（または読み比べ）、理解した内容についてまとめたり、自分の考え（感想）を持ったりする活動が示されている。イでは「文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報」とあるが、これについての活動は「取捨選択してまとめること」にとどまっている⁽⁵⁾。一方、「現代の国語」では、読み取る情報は「論理的な文章や実用的な文章」「異なる形式で書かれた複数の文章や、図表等を伴う文章」とされており⁽⁶⁾、イでは、読み取った複数の情報から「理解したことや解釈したことをまとめて発表したり、他の形式の文章に書き換えたりする活動」を示している⁽⁷⁾。

表1 「読むこと」についての言語活動例の比較

	国語総合	現代の国語
言語活動例	イ 文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。	イ 異なる形式で書かれた複数の文章や、図表等を伴う文章を読み、理解したことや解釈したことをまとめて発表したり、他の形式の文章に書き換えたりする活動。

(3) ワークシートについて

本研究では、生徒の内面で自分の考えを明確にする思考プロセスが働いたかどうかを見取るために、ワークシートを活用する(図2)。得た情報をどのように精査・解釈したのか、その結果、思考がどう変化していったのかを順を追って整理させる。

ワークシートは、①あるテーマについて自身の考えを記述し、その後、②そのテーマに関する、形態や視点の異なる複数の情報に触れ、それらの情報の吟味を経て、③自分の考えをまとめ、④再度、自分の考えを記述するという構成にした。

また、このワークシートの記述を基に単元全体を振り返ることを通して、生徒は自らの内面で思考プロセスがどのように進んでいったかを確認し、思考の方法をどの程度身に付けることができたかをメタ認知できるものとする。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

複数の情報を吟味し、関連付けながら自分の考えを伝える学習活動を行えば、自分の考えを明確にす

1年()組()番 氏名()

中学校で職場体験を控えているあなたの後輩が、「私は特にすごくやりたい仕事！っていうのがあるわけじゃないから、将来はずっとアルバイトでもいいかなと思ってるんですけど、先輩はどう思いますか？」と相談をしました。後輩に分かってもらえるように、あなたの考えを伝えてあげましょう。😊

① 後輩へ。

② 働くことに関するいくつかの情報を見てください。👁️👁️

A 内田樹「なぜ私たちは労働するのか」	B	C	D
E	F	G	H

③ これらを踏まえて、あなたの考えをまとめましょう。

④ もう一度、最初の後輩の相談に対する答えを書いてみましょう。

後輩へ。

⑤ 炎上程度でランキングし、その順位にした理由をまきましょう。

1位...	2位...	3位...	4位...
5位...	6位...	7位...	8位...

国語総合「なぜ私たちは労働するのか」ワークシート

図2 自分の考えを明確にする思考プロセスを振り返るワークシート

る思考プロセスを習得させることができるだろう。

2 検証の視点と方法

本研究は、自分の考えを明確にする思考プロセスを生徒に習得させることを目指すものであるが、今回の学習活動のみを通して、生徒が思考プロセスを習得できたかどうかを見取することは困難である。そこで、本稿では、今回の授業において生徒が自分の考えを明確にする思考プロセスに沿って思考し、表現を行うことができたかどうかを検証する。

表2に、検証の視点と方法を示す。

表2 検証の視点と方法

	検証の視点	検証の方法
1	自分の考えを明確にする思考プロセスに沿って考え、表現することができたか。	ワークシート
2	複数の情報を関連付けて考えを形成する学習活動は、自分の考えを明確にする思考プロセスを習得するために有効といえるか。	ワークシート 振り返り

IV 授業について

1 授業の内容

- 期 間 令和元年6月10日～令和元年6月20日
- 対 象 所属校普通科第1学年（3展開のうち1クラス24名）
- 題材名 「なぜ私たちは労働するのか」
- 目 標 複数の情報を相互に関連付けて自分の考えを明確にする思考プロセスを身に付けることができる。

2 指導計画（全7時間）

時	学習活動
1	後輩にアドバイスするという想定で、労働について自分の考えを記述する。
2	教科書本文を読み、文章の内容を捉える。
3	
4	複数の資料を読み、それぞれの内容を捉える。
5	読み取った資料を、重要度の高いものから順にランク付けし、その順位にした理由も記述する。
6	第1時と同じテーマで再度自分の考えを記述し、最初の記述と比べて変化したことを振り返る。
7	「選挙においてより良い投票をするためにどのような準備を行うか」という想定で自分の考えを記述する。

3 授業の実際と指導の工夫

内田樹による『なぜ私たちは労働するのか』という評論を起点とし、「働くこと」についての複数の情報（統計、表、グラフ、インターネット記事、書籍）を吟味することを通して、自分自身の考えを明確にしていく思考のプロセスを習得させることをねらいとした。一つの物事に対しても、短絡的に考えて答えを出すのではなく、様々な観点からの情報を相互に関連付けて考えることで、根拠のはっきりとした意見を持つことができ、そのことが、国語の授業だけではなく、他の教科や日常生活においても有益であると気付かせたい。また、「後輩へアドバイスする」という場の設定により、ただ自分の考えを書くのではなく、相手意識を持って表現に取り組ませるものとなっている。

(1) 後輩へのアドバイスを記述する

第1時に、「将来やりたい仕事があればずっとアルバイトをすれば良いのではないか」と考えている後輩にアドバイスをするという想定で自分の考えを記述した。「経済面を考えて、正社員になった方が良い」という趣旨の記述をした生徒が59%、「アルバイトでも良い」という趣旨の記述をした生徒が27%、「その他（やりたい事を見つけるよう頑張っ等）」が14%であった。

(2) 複数の情報を関連付ける

表3に示す8種類の資料の読み取りを4人グループで行った後、個人作業で、自分の考えを形成する上で重要なものから順にランク付けし、その順位にした理由を記述するという活動を行った。個人作業の後、ペアで交流し、他者の記述を見ることで、自分の考えとの違いを発見したり自分の記述の理由を説明し合ったりする姿が見られた。

表3 生徒に提示した資料

	資料	形態
A	内田樹『なぜ私たちは労働するのか』	文章 (教科書教材)
B	「2017年正社員の平均手取り額」と「アルバイト求人の一例」	表
C	厚生労働省「平成26年度就業形態の多様化に関する総合実態調査の概況」より、現在の職場での満足度	グラフ
D	総務省統計局「労働力調査（詳細集計）平成30年平均（速報）」より、「年間収入」階級別人数	表
E	雇用形態別各種保険の適用率	表・文章
F	正規雇用と非正規雇用のメリット・デメリット	表
G	twitterに投稿された個人の意見	webページ
H	鈴木貴博『「AI失業」前夜—これから5年、職場で起きること』より抜粋	文章

表3に示した資料を提示したねらいは、それぞれ以下のとおりである。

- ・資料A：識者の述べる“労働の意義”を示す。
- ・資料B：一時的な手取り額であればアルバイトと正社員で変わらない場合もあることを示す。
- ・資料C：収入以外の面からも正規雇用と非正規雇用を比較することができること、非正規雇用の方が満足度が上回っている項目もあることを示す。
- ・資料D：年間収入の額から正規雇用と非正規雇用を比較させる。
- ・資料E：高校生は日頃意識することが少ないであろう健康保険について着目させる。
- ・資料F：生徒がキャリア教育の場や進路LHRでも目にするような、正規雇用と非正規雇用のメリットとデメリットについて表にまとめられたものであり、両者の比較をしやすくする。
- ・資料G：個人が自由に発信できるインターネット上の情報の信憑性について考えさせる。
- ・資料H：最新の労働問題と、今後の展望について考えさせる。

(3) テーマについて再度記述する

A～Hの資料の関連付けに基づいて、労働についての自分の考えを箇条書きなどの形でまとめた。このことによって、関連付いた内容が、個々の生徒の内面で整理され、表現活動に働く思考をより機能させやすくなった。その後、再度、後輩へのアドバイスという設定で記述を行った。考えの根拠となる複数の情報を手に入れ、関連付けたことにより、考えが深まり、全ての生徒の記述の量が、1回目より増加した。

(4) 1回目と2回目の記述を比較し、変化した点とその理由について自己分析を行う

最初は個人作業で自己分析を行い、その後、4人グループで交流を行った。記述の趣旨には変化がなかった生徒にも、「1回目より理由を明確にして詳しく書けた」「1回目より自信を持って書けた」「分かりやすいアドバイスになった」という自己分析が見られた。その理由は、「資料を見て正規雇用と非正規雇用のメリットとデメリットについて詳しく知ることができたから」「資料を見て、一つの方向からではなく多面的に考えることができたから」「資料を見て、自分の意見を裏付ける根拠を見つけたか

ら」という3点のいずれかであった。

(5) 自分の考えを明確にする思考プロセスを別の場面でどう生かすか考察する

自分の考えを明確にする思考プロセスを他の場面で生かそうとする姿勢を習得したかどうかを見取るために、図2のワークシートとは別のシートを用意し、「選挙で誰に投票するかを決定するためにどのような手順を踏むか」という状況を設定し、自由記述させた。これは、当初、明確な意見をもっていなかったとしても、多くの観点について様々な視点からの複数の意見に触れ、根拠に基づいて選択をすることが必要とされる場面であり、ワークシートへの記述を通して身につけた思考のプロセスを他の場面で生かそうとしているかどうかを見取るために適当であると考え、設定した。生徒たちが、自分の意見を決定するための根拠とした情報は、挙げた生徒の人数が多い順に「候補者の公約(90%)」「他の有権者の意見(43%)」「候補者の演説(33%)」「社会の現状や課題(24%)」「候補者のこれまでの実績(24%)」の五つに整理することができた(カッコ内は、その情報を根拠として挙げた生徒の割合)。これらのうち、四つ以上併記した生徒はおらず、三つを併記した生徒が38%、二つを併記した生徒が38%、一つのみを挙げた生徒が24%であった。また、思考プロセスの習得について生徒がどの程度意識しているかを見取る目的で、単元全体に関する振り返りを自由記述させた。

V 授業の結果分析と考察

1 自分の考えを明確にする思考プロセスに沿って考え、表現することができたか

7頁の図3は、図2のワークシートに生徒が実際に記入したものである。これらの記述から、「対象認識に働く思考」と「表現活動に働く思考」を見取ることにした。「対象認識に働く思考」が機能しているかどうかをワークシート中の②と③の記述から、「表現活動に働く思考」が機能しているかどうかをワークシート中の①と④の記述の比較から、上記二つの思考を往還させながら表現を行ったかどうかをワークシート中の②と④の記述から見取り、4段階のルーブリックを作成して評価を行った。ルーブリックの各段階において典型的な記述である4名の生徒の例を、8頁の表4に示す。同頁の表5がそのルーブリックである。また、同頁の表6が、評価の結果である。

表4 生徒の記述例

	ワークシート①	ワークシート②資料の順位づけ	ワークシート③	ワークシート④	実際に記述に影響したと考えられる資料
生徒 i (評価 A)	すごくやりたい仕事がないからアルバイトをするという考え方はやめた方がよいと思うよ。今、働いている人の中には、別にやりたい仕事ってわけじゃないけど働いている人って多いと思う。仕事をしないとお金がもらえないし、もらえないと生きることは難しい。だから、アルバイトというのはやめた方がよいと思う。普通に働きなさい。いまの自分が将来の自分を殺すというのはやめてね。絶対。	1位: D 2位: C 3位: F 4位: A 5位: H 6位: B 7位: G 8位: E	正規雇用と非正規雇用の一 番の違いは「収入の多さ／少 なさ」という考えになった。 バイトの方が収入が多いこ ともあったりするが、全体的 に見るとやっぱり正規雇用 の方がよいと思える。	今はやりがいを感じるか感じないかとか自分がやりた い仕事だからとか、自分を中心に将来の選択ができる 時期だけど、結婚したり子供ができたりして家族がで きた時、他の人の将来のことも考えないといけないと きに、アルバイトだと収入面、お金の問題を抱えてし まうと思う。正規雇用と非正規雇用では、やっぱり正 規雇用の方が収入が良い。労働する意味って何だろう とか、何で私は働くのか？誰のために働くのか？とい うのをしっかり考えてみるというのはとても大切だと 思う。やりたい仕事をするために働く。その先に何が あるかというのをよく考えてアルバイトをするか、正 規雇用にするか決断した方がよいと思う。私以外にも 色んな人の意見を聞いたりネットや本で調べたりして 情報をたくさん集めてみて！	A, C, D, E, F
生徒 ii (評価 B)	今はやりたい仕事が見つ からなくても、職場体験な どの様々な経験を通して、 自分がやってみたいこと が見つかると思うから、今 はいろんなことに挑戦し たらいいと思うよ。	1位: D 2位: F 3位: A 4位: B 5位: C 6位: E 7位: H 8位: G	資料Dの正規雇用と非正規 雇用のグラフから、正規雇用 は男性の方が多く女性は少 ないことがわかった。(仕事 と家事の両立が難しいので は) GのようなTwitterを見るの は良いことかもしれないけど、 他人の意見に流されるのは 良くないと思う。	特にすごくやりたい仕事がなく、流れて何も考えず に仕事を見つけてやるのは絶対にやめた方がよいと思 うよ。アルバイトと20代の月収はほぼ同じくらいで、 月収は50代がピークだからそこまで頑張って仕事を続 けようと思っても、仕事に対してのやりがいを見つけ ないし仕事を続けることは難しいと思うよ。正規雇用 にも非正規雇用にもメリット・デメリットがあるから、 それを理解した上で、自分のやりがいとなる仕事を見 つけていってほしい。Twitterを見ると、人の意見に流 されてしまうかもしれないから気をつけてね。	A, B, C, D, F, G
生徒 iii (評価 C)	それは職場体験やってから 言え。やりたい仕事見つ かるかもしれないぞ。見つ からなくても、非正規より正規 雇用の方がほぼ確実に給 料高いから。やりたくなく ても普通になんか仕事就 くのを俺はオススメする ぞ。まあ決めるのはお前な んだけどな。	1位: A 2位: F 3位: C 4位: B 5位: E 6位: D 7位: H 8位: G	やっぱり正規雇用の方がい い。生活が安定するから。た だどうしても家でやりたい ことがあるなら、働く時間 を選べるバイトの方がいい。つ まり、結局は人による。	まあそれは職場体験やってから言おうな。やりたい事 が見つかるかもしれないし、逆にやりたくない事も見つ かるかもしれない。それでも特にやりたい！って事がなく ても、アルバイトよりも正社員の方が良いよ。多少 苦労はするかもしれないけど、生活はアルバイトよりは 安定すると思う。とりあえずは自分のしたい事見つけ よう。	C, F
生徒 iv (評価 D)	自分の好きなようにやれ ばいいと思う。なりたい職 業がそのうち見つければ、 その仕事をする為に努力 すればいいし、見つからな ければ、アルバイトでいい と思う。	1位: F 2位: E 3位: B 4位: D 5位: C 6位: A 7位: H 8位: G	他からの情報や自分で実際 に確かめていない情報をあ てにしたらダメなのかなと 思った。自分の目で見て確か めてから職業選びをした方 が自分の為にもなるんじや ないかなと思った。	本当にアルバイトの方がいいか、一回、アルバイトを してみることをおすすめする。その後で、正規の会社 に行って仕事風景を見学させてもらうことをおすすめ する。自分の目で見て確かめてから物事を決めた方が、 自分の為にもなると思う。	資料を根拠 とした記述 になってい ない。

表5 評価のためのルーブリック

	観点:自分の考えを明確にする思考プロセスに 沿って考え、表現することができている
A	対象認識に働く思考と表現活動に働く思考 をともに機能させ、それらの往還を十分に生 かした表現を行うことができている。
B	対象認識に働く思考と表現活動に働く思考 をともに機能させ、それらを往還させながら 表現を行うことができている。
C	対象認識に働く思考と表現活動に働く思考 をともに機能させ、表現を行うことができて いる。
D	対象認識に働く思考を機能させることがで きていない。

表6 ルーブリックによる評価の結果

評価	A	B	C	D
生徒の割合	32%	54%	5%	9%

表4の生徒 i, ii は、読み取った情報を元に資料
の順位付けを行い、その内容に基づいてワークシ
ート③の記述を行っている。さらに、ワークシート④
の記述においては、③で挙げたものの以外の複数の資
料も記述に影響しており、④の表現を行う際には「対
象認識に働く思考」と「表現活動に働く思考」が往
還していたと見ることができる。そのうち生徒 i は、
④の記述において、「自分だけではなく家族のこ
とも考えなければならない（自分はなぜ／誰のために

働くのか?)」という具体的な状況に言及しており、自分の考えを相手に実感を持って納得してもらうための工夫が見られた。このことから、思考の往還を十分に生かした質の高い表現を行っていると判断し、評価「A」とした。生徒iiiは、各資料の内容を把握し、順位付けすることはできており、読み取った内容から考えの形成を行っているが、読み取った内容がワークシート④の表現にほとんど反映されておらず、生徒自らが最も重要であるとした資料Aに基づく記述は③にも④にも見ることができない。そのため、「対象認識に働く思考」と「表現活動に働く思考」の往還は行われていないと判断した。生徒ivは、資料を読み、順位付けは行っているものの、ワークシート③の記述の時点で、読み取った情報に基づく考えの形成が見られず、ワークシート④の記述についても同様であったため、評価「D」とした。

表6より、自分の考えを明確にする思考プロセスに沿って考え、表現することができた「A」「B」評価の生徒は86%であり、これらの生徒は、それぞれの資料の内容を正しく把握し、読み取った複数の情報を関連付けながら考えを形成することができていたといえる。

以上のことから、複数の情報を吟味し、関連付けて考えを伝える活動を通して、生徒は自分の考えを明確にする思考プロセスに沿って考え、表現を行うことができたと考ええる。

2 複数の情報を吟味し、関連付けながら自分の考えを伝える学習活動は、自分の考えを明確にする思考プロセスを習得するために有効といえるか

生徒による授業の振り返りの例を図4に、「今回の学びを今後どのような場面で生かせると思うか」という自由記述の例を図5に示す。

図2のワークシートを用いた学習活動を通して、異なる形態の複数の情報に触れ、情報どうしを互いに関連付ける過程を踏むことは、考えや意見を整理し、相手や目的に応じた適切な表現を行うに当たって良い効果をもたらすことが分かった。また、図4の生徒の記述内容から、複数の情報を吟味し関連付けて自分の考えを伝える学習活動は、自分の考えを明確にする際に有効であったと生徒が考えていることが分かる。さらに、図5からは、自分の考えを明確にするべき場面において今回行った学習活動を生かすことができると生徒が考えていると捉えることができる。

以上のことから、複数の情報を吟味し、関連付け

ながら自分の考えを伝える学習活動は、自分の考えを明確にする思考プロセスを働かせるために有効であったといえ、このような学習活動を反復して行うことで、自分の考えを明確にする思考プロセスを習得することができると考える。

- ・自分の意見をまとめるために様々な情報を関連付けたり他人の意見を聞いたりすることが大切だと思った。
- ・答えが一つだけではない問題について自分の考えを持つ方法を学べた。(情報や知識の活用の仕方)
- ・物事を決める際には少数の意見や情報に縛られず、なるべく多くのことを目にする方がいいということを学んだ。
- ・自分の持っている知識だけでは不十分なところもあるかもしれないので情報を集めて意見を決めることが大切だと感じた。
- ・相手にアドバイスするにはたくさんの情報や知識を知った上である必要があると思った。情報が少ないと自分の意見の押し付けになってしまう。
- ・少ない情報や知識で相手に発信しようとするすると誤った情報を渡してしまったり、信ぴょう性の低い発言になってしまうから、情報を集めて相手に伝わるようにまとめることが大切だと思った。

図4 授業後の生徒の振り返り

- ・進路選択、職業選択の時
- ・誰かに相談をされた時
- ・調べ学習をする時
- ・商品を買うか買わないか決める時
- ・メディアの情報を判断する時
- ・問題を解決するための話し合いをする時

図5 生徒が「今回の学習を生かせる」と考える場面

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

複数の情報を関連付けながら自分の考えを伝える学習活動は、自分の考えを明確にする思考プロセスを働かせるために有効であることが分かった。また、今回の研究を通して、自分の考えを形成し表現する際に、自分の肯定したいこととは異なる内容を示す情報にも触れ、複数の情報どうしを関連付けて思考することで、自分の考えや主張の根拠が明確になり、説得力のある記述ができることが分かった。

今後、このような学習活動を反復して行うことで、自分の考えを明確にする思考プロセスを生徒に習得させることができると考える。

2 今後の課題

複数の情報を関連付けて自分の考えを伝える活動において、資料の読み取りが正しく行えない生徒、読み取った複数の情報を、自分の考えを形成するために上手く活用できない生徒が見られた。また、生

徒に提示する資料の妥当性にも課題が見られた。そこで、次のように改善していく必要があると考える。

- ・授業後の生徒の感想に、「教科書の文章が難しく意味が分からなかった」「資料Hは文章なので読みにくく、意味が分からなかった」という記述が見られたことから、そのような生徒は、資料の読み取りが困難であり、その結果、複数の情報を関連付けて自分の考えを記述することができなかった。そのような、読み取りの段階でつまづいている生徒に教師が気づき、個別に適切な支援を行う必要がある。また、提示する資料を精選する段階で、資料の難易度が生徒にとって適切であるかどうか検討する必要がある。
- ・今回設定した「労働」というテーマは、生徒たちが既に持っている「生きるためにはお金が必要である」という価値観によって思考が左右されやすいものであり、意見の着地点にもあまり多様性は生まれにくいものであった。そこで、より多様な考え方や着地点が想定される題材を用い、継続的に取り組むことによって、自分の考えを明確にする思考プロセスを生徒に意識させることができると考える。
- ・今回提示した資料Fは、生徒が日頃、国語の授業以外の場（キャリア教育の場や進路LHRなど）で目にするような、正規雇用と非正雇用のメリットとデメリットが表に整理されたものであった。これは資料としては両者の比較を読み取りやすいが、生徒自身が資料をじっくり吟味し、両者のメリットとデメリットを分類するという過程を省略する形になってしまった。実際に、重要視した資料の上位3位までに資料Fを挙げた生徒は全体の77%に上り、この資料が生徒の思考に大きく影響を及ぼしたことが分かる。このことから、今回提示した資料Fは、生徒が複数の資料を関連付けて思考することをスムーズに行う助けになったという良い面もあるが、一方で、生徒自身による“複数の資料の関連付け”を妨げたとも考えられる。限られた時間の中で実践を行うに当たっては、その単元にかけられる時間数も考慮しつつ、情報の整理をどこまで生徒自身に行わせるかを熟考し、提示する資料を精選する必要がある。

【注】

- (1) 中央教育審議会（平成28年）：『言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめについて（報告）』別添資料2に詳しい。
- (2) 田中宏幸（2019）：「高等学校「国語表現」の授業をど

う考えるか—学習指導計画の作成と評価—」『日本語学第38巻第5号通巻第492号』明治書院p.99に詳しい。

- (3) 幸田国広（平成31年）：「第2章第1節 現代の国語」大滝一登監修『高等学校新学習指導要領を踏まえた授業づくり実践編』明治書院p.32に詳しい。
- (4) 大澤由紀（2019）「情報を関連付け、考えを形成させる学習指導の研究—リーフレットという表現様式・媒体を活用した言語活動を通して—」千葉大学教育学部附属中学校研究紀要p.11に詳しい
- (5) 文部科学省（平成22年）：『高等学校学習指導要領解説国語編』教育出版p.27に詳しい。
- (6) 文部科学省（平成30年）：『高等学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社p.98に詳しい。
- (7) 文部科学省（平成30年）：前掲書p.101に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成30年告示）：『高等学校学習指導要領』p.33
- 2) 文部科学省（平成30年）：『高等学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社p.63
- 3) 文部科学省（平成30年）：前掲書p.69
- 4) 高木展郎（2018）：「第3章 新学習指導要領Q&A」大滝一登・高木展郎『新学習指導要領対応高校の国語授業はこう変わる』三省堂p.115
- 5) 文部科学省（平成22年）：『高等学校学習指導要領解説国語編』教育出版p.9
- 6) 中央教育審議会（平成28年）：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』p.124
- 7) 中央教育審議会（平成28年）：『言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめについて（報告）』p.7
- 8) 文部科学省（平成30年告示）：前掲書p.35
- 9) 幸田国広（平成31年）：「第2章第1節 現代の国語」大滝一登監修『高等学校新学習指導要領を踏まえた授業づくり実践編』明治書院p.71

【参考文献】

- 田近洵一・井上尚美・中村和宏 編（2018）：『国語教育指導用語辞典〔第五版〕』教育出版
- 町田守弘・幸田国広・山下直・高山実佐・浅田孝紀 編著（2018）：『シリーズ国語授業づくり—高等学校国語科—新科目編成とこれからの授業づくり』東洋館出版社
- 萩中奈穂美（平成29年）：『「説明表現能力」育成のための学習指導論』溪水社
- 高木展郎（2019）：『平成30年版 学習指導要領改訂のポイント 高等学校 国語』明治図書
- 田中宏幸・大滝一登 編著（2012）：『中学校・高等学校 言語活動を軸とした国語授業の改革 10のキーワード』三省堂
- ヴィゴツキー著・柴田義松訳（2001）：『新訳版・思考と言語』新読書社
- 多田孝志（2018）：『対話型授業の理論と実践—深い思考を生起させる12の要件—』教育出版